

無門

無門福祉会広報

第 117 号

2014年11月

発行・社会福祉法人無門福祉会

発行責任者・三浦 孝司



特集 SPECIAL “むもん市”の可能性について考える 座談会

CONTENTS

■ 特集 “むもん市”の可能性について考える【座談会】	② ③	■ むもん歳時記 子どもの成長に学ぶ	⑥
■ 活動レポート ・法人一体での催事販売・遊びプロジェクト	④	■ スポットライト ・視点・わいわい家族	⑦
■ 支援日記 非日常の大切さ	⑤	■ むもんまつりの報告	⑧
■ 結 青少年ボランティア	⑥	■ 編集後記	⑧

〒470-0376 豊田市高町東山7-43 電話(0565)45-7883 FAX(0565)45-7886 HP <http://mumon-fukushi.net/> Email info@mumon-fukushi.net

MUMON



特集

“むもん市”的可能性について考える

座談会

今回のメンバー

大谷 等（あおいそらカフェ）、塙原 礼実（無門学園）
内川 弘之（青い空）、大塚 夏未（青い空）

はじめに

昨年度より、毎月第2土曜日に開催している“むもん市”

地域交流を目的としながらも、自主製品の販売や利用者の余暇という視点も取り入れ実施してきた。

今回はこの1年半を振り返った上で、今後の“むもん市”的可能性について考えてみた。

これまで

大谷 自主製品の販売機会の確保という目的からは、毎月第2土曜日に開催することで、単純に販売の機会が増え、就労支援事業の売上の増加にもつながっているから良かったんじゃないかな。

大塚 一緒に販売している利用者さんが、当初は横にいるだけでしたが、最近は、自分の役割だと認識して、意欲的に呼び込みをする様子が見られています。

内川 そうですね。販売も、当初は職員から声をかけていましたが、売り場の固定をすることで、自分の役割だと感じ

て、「次も販売するね。」という発言もみられ、働く意欲にもつながっているように思います。

塙原 利用者さんの楽しみにもなっていますね。買い物したり、好きなものを食べたり…。それに、認知度はまだ低いけど、むもんを知ってもらう、1つのツールとして機能していると思いますよ。

大谷 確かに地域の人のステージ出演や出店も増えたけど、地域の人がお客様として来ることは少ないので、そこは今後の課題ですね。

今年度の取り組み

大谷 今年度は、全国の福祉施設の質の高い商品を販売し、良い商品を扱うことで、“障がいのある人のイメージを変えよう”という取り組みをしているけど、実際、来場者からの反応を見てもいい効果が出ていると思います。

塚原 地域の人向けた情報発信ということではいいと思いますし、私たちにとっても他の事業所の商品を客観的に見ることができて良かったと思います。価格の設定やPOPなど、新しい気づきを得ることができました。

大塚 むもんを知ってもらうだけでなく、むもん市を通じて、障がいのある人が作る商品を購入することが、働く障がい者を応援することにつながっていくといいですね。



大谷



塚原

内川 魅力ある商品が多いのでリピーターの方も出てきています。良い商品は地域の方からも喜ばれるから、さらに広がっていくといいですね。

これから

塚原 もっと地域の方が参加できるといいですね。今はどうしても“福祉まつり”というイメージが強く、敷居が高いと思います。たとえば収穫祭などを実施することは1つの方法だと思いますね。福祉を前面に出すのではなく、自然に地域の方が交流できる場を目指す必要があると思います。

大塚 自分自身、接客のマナーひとつとっても、福祉だからこれでいいやという思いがあつたりして、外で働く・販売するという視点が弱いので、そういう意識を変えることで、むもん市全体が“福祉まつり”を脱却することにつながると



大塚



内川

思います。

大谷 場所を変えてみるのもいいかもね。たとえば運動公園を会場にして…。駐車場もあるしね。そうすると自然にお客さんは集まるんじゃないかな。

大塚 いいですね。私自身も家の近所の福祉施設でイベントをやっていても行かないと思います。でも近所の商店街のイベントなら行くかもしれません。まずは、利用者さんも含めた地域の方が楽しめるイベントになれば地域福祉の中心的な役割も担えると思います。

内川 障がいのある人のことだけでなく、もっと地域にも目を向けないと地域福祉の実現はないと思います。そのためには、地域で必要とされるものでなければいけないから、このイベント自体、地域の人と一緒に作り上げていけるとおもしろい展開ができるんじゃないですかね。

まとめ

自主製品の販売や利用者の余暇という視点については、一定の成果が得られているようだ。

しかし、地域交流という点では、依然、地域の方の来場者は少なく十分でない。

その問題として今回のメンバーでは“福祉的なイメージ”が強く、地域に目を移せていないとの意見が上がっていた。

地域福祉の発展を目指す社会福祉法人としては、このイベントがひとつ重要な取り組みになってきそうだ。

今後のむもん市はどう変化するのか?たくさんの可能性が感じられとても楽しみである。



活動レポート

法人一体での催事販売

10月1日から7日まで、松坂屋豊田店の催事に出店しました。椎茸やショートブレッドなど、法人の自主製品を知りたく良い機会となりました。

これまでは、こうした催事には、その商品を作っている就労支援事業所の職員が中心となって販売していました。しかし、自分が働いている職場の商品を知らないということは良くないので、今年度から、入所施設をはじめ他の事業所や事務局も販売員として参加することになりました。

秋のイベントシーズンを迎え、他の事業所のイベントや地域のお祭りにも積極的に参加しています。事業所を超えた職員間で販売することで、実際に商品を作っている職員が、他の職員に商品の説明を行う必要があるため、あらためて、

その商品を知る機会になっています。このように、お互いが新しい気づきを得ることで、スキルアップにつながり、結果として組織力の強化につながっています。まだ課題は多く、支援が行き届いていない現状ではありますが、今後も利用者さんが主体的に働く環境を法人一体となって進めていきます。



大谷

秋晴れの運動会

遊びプロジェクト

10月4日、秋晴れの中、恒例の「むもん大運動会」が行われました。職員も利用者さんも保護者の方も、普段とは違う表情を見せ、とても和やかな雰囲気となりました。

今年は利用者さんも、運営サポートとして事前準備などの手伝いを行いました。これまでは、準備や片づけは職員が行っていて、利用者さんは参加するだけでした。利用者主体という視点から、運営にも携わってもらうことにしました。

どんな競技内容にするか?必要な備品は何か?雨の場合はどうする?保護者への連絡はどうする?弁当の注文はどこにする?など、いわゆる裏方の仕事はとても多いのですが、利用者さんは何も知らないのが現状でした。

当日参加するだけでなく、事前準備に携わったことで、役割を感じた利用者さんも見られました。備品を担当した利用者さんも、みんなが玉入れを行う様子を少し離れた場所から誇らしげに眺めていたのが印象的でした。テント設営を行った利用者さんの笑顔には、キラリと汗が光っていました。

人は誰でも役割を感じると嬉しいものです。それそれが得意分野で力を発揮すると、とても大きなパワーになることを感じました。



古谷野

**支援
日記**

非日常の大切さ

無門学園 支援員
藤本 淳美

「この人はこういう人だよね。」

支援現場で働いている私たちが、ついつい口にしてしまうこの言葉。日常生活だけでその人のすべてが分かったような気になり、勝手にその人のすべてだと考えてしまう…。私も無門学園へ勤め始めた7ヶ月、何度もそういう風に考えてしまったことが、正直ありました。しかし、日常だけではなく非日常の生活を垣間見ることで利用者さんにも日常とは異なった非日常の顔があることを改めて実感することができました。今回はそのことを改めて気付かせて下さったHさんについてお話ししていきたいと思います。

Hさんは平日の日中、ボールペンを組み立てて並べる、下請け内職の仕事をされています。しかし、あまり好きではないためか、仕事を放置し外を眺めていたり、仕事時間中にも関わらず仕事で使用している道具を片付けようしたり、急に外へ飛び出して行ってしまうことが多々あります。私はそんなHさんを見て「この人はこういう人なんだ。」と思っていました。

しかし、その考え方を改めさせてくれた出来事がありました。9月に施設の利用者さん全員で行った和歌山旅行での事です。旅行中にHさんが急にどこかへ飛び出して行ったり、モノを気にしたりしないか心配でしたが、先輩職員さんの配慮もあり、Hさんは行きのバスからとても嬉しそうな顔をされていました。温泉がいくつもある広いホテルでの温泉巡りでも、お部屋で過ごす時も日常とは違い、満面の笑みで落ち着いて過ごされているHさんを見て私は「Hさんもこういう顔をするのか。」と少し驚いてしました。

旅行ではHさんも含め、他の利用者さんの日常とは違った顔を見ることができ、誰でも日常と非日常は違い、決して日常の顔がその人のすべてではないことを再認識することができました。私たち支援員のちょっとした意識や工夫で利用者さん達の暮らしや環境が変化していきます。今回Hさんの非日常に触れたことで「仕事をやらない人」などと勝手に決め付けてしまう前に、なぜそうなのかを考え、Hさんに適した仕事環境や支援などを考えていくことが大切だと痛感しました。

「この人はこういう人だよね。」と決め付けてしまう前にその人の日常の顔、非日常の顔を知り、その人がいきいき暮らす・働くためにはどうしたらいいかをこれからも試行錯誤していきたいです。

今日もHさんの新たな一面を発見することができました。

さて、明日はどんな発見があるのか…とても楽しみです。



結 青少年ボランティア

無門学園 生活支援員
塚原 礼実



無門福祉会では、毎年、豊田市青少年センターの高校生ボランティアの方を、定期的に受け入れています。

主に、むもん市や運動会等のイベントの補助、無門学園の休日余暇の補助、施設内の清掃活動など多岐に渡ってサポートしていただいています。

はじめて、知的障がいの方と触れ合う方もいらっしゃいますが、そこでは、ボランティアの方の率直な意見が伺え、職員スタッフとしても多くのことに気づかされます。

※青少年ボランティアは、豊田市青少年センターが主催する企画で青少年の社会参加を支援する指導者を育成するとともにさま様々なボランティア活動を通じて心豊かな青少年の育成を目的に高校生の方のボランティアスクールを実施しています。

高校生ボランティアTさん

将来介護の仕事をするために、色々な人と関わり自分の世界観を広げたいと思い、ボランティアをはじめました。

施設というのは、暗いイメージがあつたけど、利用者さんも職員も明るくてイメージが変わりました。

利用者さんが運動会で、競技だけでなく裏方の仕事を任されているのが意外でしたが、それが良いと思いました。

高校生ボランティアIさん

障がいがあっても、運動会でいろんな競技に参加できるのだなと驚きました。特に玉入れに利用者さんが白熱していて見ていてこちらも盛り上りました。

最初、無門学園に来た時に(利用者のAさんについて)最初はとまどいましたが、ボランティアの回を経ることに相手の方と少しずつコミュニケーションがとれるようになつたことが嬉しいです。

高校生ボランティアUさん

運動会の運営の補助をしましたが、利用者さんが、競技に熱中したり、むもん市とは違う表情を見せていて、こんな一面もあるのだなと思いました。

自分もわくわくした気持ちになり楽しかったです。

青少年センタースタッフKさん

高校生ボランティアの方が最初はおそるおそる相手の方と接していましたが、ボランティアの回数を重ねる毎に、相手の気持ちを必死に読み取ろうとしたり、自分の感じた事を積極的に相手に伝えようとする姿勢がとても輝いて見え、そこにボランティアの魅力を感じます。

このような機会があることはとても素晴らしいです。障がいを持つた方ともっと普通に交流できる社会になればと思います。

むもん
歳時記

子どもの成長に学ぶ

無門学園 土井 竹司

先日、長男の保育園で運動会が開かれ、家族で参加してきました。小さい子供達が、自分の持てる力を一生懸命出しながら、踊り・かけっこ・シート捲りなど、1歳から5歳までの子がハツラツと運動会に参加していました。

我が家は長男はかけっこが遅く、最後尾でしたが、踊りは大好きで親ばかですが、クラスで1番上手に踊っていました。得意・不得意はありますが、全ての競技で笑顔が絶えませんでした。

かけっこで転んでしまった子や、竹馬競争で失敗してしまった子など、失敗しても、変わらず満面の笑顔で一生懸命な子供たちの姿を見て、勇気と力を沢山もらいました。そして失敗を恐れずに力いっぱい行動することの大切さが再認識できました。

私も無門福祉会に入社して1年半。失敗にくじけたり、思うように仕事が進まず、悩んだり挫折の繰り返しでしたが、今回、たくさんの子供達から、エネルギーを沢山もらいました。また失敗してしまったことを悩むのではなく、次に活かせる方法を考え、失敗を恐れずに一生懸命行動して仕事を頑張ろうと思いました。



スポットライト

利用者さん 視点

第7回ふれあいアート展で高橋真二さんが大賞を受賞されました。

ご本人にとってもうれしい出来事だと思うのですが、グループホームで担当をさせていただいている私もうれしく思います。

私は以前からアトリエ事業にも関わっており、利用者さんの作品展等の出展のお手伝いをさせていただいているのですが、そのころから高橋真二さんの芸術作品にとても魅力を感じています。

真二さんは、これまでアート活動を中心に日中活動の場で時々顔を合わせる程度のお付き合いでした。今年の4月から私がグループホームへ異動となり、真二さんと生活の場で関わる機会が多くなりました。

新聞や雑誌、チラシに書いてある活字が好きな真二さんは、いつも貰って来たチラシやレジメを真剣な眼差しで食い入るように見つめています。そんな彼の絵画作品は、文字をモチーフとしたものが多く、その文字は文章という言葉の集合体の中で、その物ひとつひとつが持つ形状のみを使って、私たちに何かを語りかけてくるような印象を与えます。

私たちと同じものを見ているのに、彼が吸収しアウトプットしたものは、こうも我々と視点が異なったものであるのかと驚かされることがあります。世の中にはこれを演出として行う人がいますが、彼にとってはおそらくこれが自然に為せることなのでしょう。

「視点」という言葉は2つの意味で使われると聞いたことがあります。一つはどこを見ているか、もう一つはどこから見ているか。そんな真二さんと関わっていると、我々があたりまえのように見過ごしているものが、利用者さんにはしっかりと大きく見えていて、私達が重要視していないことが、利用者さんにとって大切なことであったり、その逆もあったりするのではないかと考えさせられます。真二さんは私に多くを語ってはくれませんが、彼の作品が物事を様々な立ち位置と焦点で見るようになると、教えてくれているように感じます。

(Homeさぽーと 若田友樹)



職員 わいわい家族

「うちの家族は、みんなイニシャルがY・Yなのよ」と教えてくれた横田さん。夫の勇一さんと相談して、二人ともY・Yだから、わいわい賑やかな家族にしたいと、子どもたちの名前も意識して、イニシャルをYにしたそうです。

長男の悠人(ゆうと)さんは、「名前の通り、おっとりしていてね」と、困った表情をしますが、「主人と趣味が合うようで、男同士、車の話で盛り上がっているよ」と、嬉しそうに話す表情は優しい母親そのものでした。

娘の唯那(ゆいな)さん、侑希(ゆき)さんとは、同じダンス教室に通う仲間同士。「私が娘たちを誘ったのよ。今では、すごく成長してね。ついていけなくて、もう私は通ってないけど」と苦笑します。そんな横田さんもダンス好きは変わらないようで、「三代目J Soul Brothersに娘たちとハマっています。かっこいい。」と笑顔を見せます。

賑やかな様子が伝わってくる横田さん一家。職場でも現場を経験後、利用者とともに働く厨房へと改革を進めた結果、家族のような厨房へと生まれ変わりました。先頭で引っ張るわけではなく、縁の下から支える横田さんはキラリと輝いていました。



よこた ゆいか
横田 由佳 青い空 栄養士

1968年神戸市生まれ。豊田市在住。福祉施設で栄養士として10年間勤務後、04年入職。現場の支援員として5年間勤務後、栄養士として厨房に復帰。利用者と共に働く環境を整備する。家族は夫と、長男(高3)、長女(中2)、次女(小6)の5人暮らしだ。

むもんまつりの報告

11月8日に「むもんまつり」が開催されました。

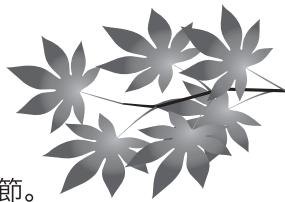
発行が遅れ、ご案内できなかったことをお詫び致します。



盛り上がりました!



編集後記



芸術の秋、食欲の秋、読書の秋、秋はイベントが多い。

寒くもなく、暑くもなく、日差しが心地よい季節。読み手においても書き手においても良い季節。

ということは、広報にとっても恵まれた季節なのだろう。しかしながら広報の締切はあっという間にやってくる。

先回の号で、広報の目的が明確になったハズなのに…。

人はなぜ同じ失敗を繰り返してしまうのだろうか。原点に戻れないのはなぜか。シンプルに考えられないのはなぜか。施設職員にどっぷり浸かりすぎて、考え方やクセがついてしまっているからだろうか。

今回の広報は物事のとらえ方・視点が取り上げられた記事が複数あった。

「思い込み」は目的をうやむやにしてしまう。「普通の暮らし」とはなにか?

「脱福祉」とはなにか?この広報の仕事は私にそれを問いかけているのだと思う。

塚原 礼実

広報委員:磯部 竜太 大谷 等 塚原 礼実

最新情報は
コチラから!

むもんブログ

<http://blog.mumon-fukushi.net/>

ケータイからも見れます!

